

図師村甲ヶ原開発に賛成した上図師・弁四郎とその家族

第3回 弁四郎の妻“こと”について

安政3（1856）年8月3日、五兵衛（上図師坂下住）は新開畑に関する相談のため、甚右衛門宅を訪ねています。その際、五兵衛は弁四郎の妻についても相談をしていますが（『日記』二・97頁下）、相談内容は日記に記載がありません。その後、弁四郎の妻“こと（殊・事・箒）”が同年12月ころから数回、坂下に居住する五兵衛の元を訪れていることが『日記』から確認できます。五兵衛は同年12月24日夜、坂下で病死します（行年60歳）。

五兵衛は8月3日の甚右衛門との話のなかで、親類である弁四郎家の今後について、甚右衛門に何らかの助力をお願いしたのかもしれませんが。そうしたことを想像させる史料が、安政4年2月付の人別送り状です（図師町・佐藤家文書2642【巻末史料1】）。

この史料によれば、弁四郎妻“こと”と弁四郎娘“こま（駒）”が、親類の神奈川宿貞助の仲介で、甚右衛門家の世話になることとなり、上図師平岡家領の人別帳から除かれ、下図師田中家領の人別帳に加わることになったことがわかります。さらに、この史料から弁四郎家の相続人は“とせ”（おそらく弁四郎長女）となり、差出人の親類として芳五郎の名も記されています。安政3年12月2日夜には芳五郎と“こと”が甚右衛門宅を訪ねており（『日記』二・107頁上）、以後、安政5年4月ころまで“こと”と“こま”を中心に弁四郎一家の面々に関する記事が『日記』二に記載されています。【巻末表】

これをみると、“こと”は甚右衛門家の農作業を手伝ったり、裁縫の仕事を請け負うなど、さまざまな仕事に従事しています。

“こと・こま”母娘が甚右衛門家に預けられて約1年後、母娘は奉公稼ぎのため、江戸へ出ることになります。母“こと”については、甚右衛門に対して出された金銭請取証が残っています（図師町・佐藤家文書2715【巻末史料2】）。この史料によれば、この度江戸へ奉公稼ぎに出ることになり、甚右衛門家で世話になっていた期間である安政3年12月から同5年2月15日までの給金3両3分2朱を請取り、印鑑は亡き夫弁四郎の物を使用したことがわかります。

現在のところ、“こと”の江戸での奉公先や仕事内容について、知ることができる史料は確認できません。“こと”は家族と過ごした図師村をあとにし、50歳を前に江戸へ働きに出ることになったのです。しかし、安政4年7月9日から安政5年3月29日までの出来事を書き留めた「晴雨日記」（図師町・佐藤家文書2016。この期間については来年度刊行予定『晴雨日記』三に所収予定）の安政5年3月15日の記事には、「こと離縁、日野江往」とあり、江戸に出た目的が奉公ではなく、婚姻であった可能性もあります。

【巻末表】 弁四郎の家族に関する「晴雨日記」記事一覧

年	月日	記事
安政3.	8.3	五兵衛来り候節、 弁四郎 後家之 嘶有之
	12.2	二日夜、芳五郎・ お事 来ル
	12.19	おこと 坂下へ見舞二往
	12.22	お事 坂下へ往
安政4.	正.9・10・13	此三日に 筈女 来、半天ヲ縫ふ、 沓ツ仕上ケ
	正.13	お事 義初之事故、五兵衛の事ヲ 嘶し、怨の模様見ゆる
	正.14	芳五郎立寄ル
	正.26	おこと 坂下へ往、串柿沓輪・半 紙沓帖、年玉ニ五兵衛へ持○源 兵衛・源之助へも半し沓帖ツ、 持往
	正.29	おこと 義、半次郎方へ仕立もの 二往
	2.2	おこと 坂下へ往、 おとせ 日野よ り来ル
	2.3	おこと 何か思ひ候哉不機嫌
	2.12	十二日夜、 お霜 来り泊、十三日 夜、同人泊
	2.14	十四日夕方、芳五郎来ル
	2.15	お霜 来ル、夕方帰ル
	2.16	お霜 来ル
	2.18	お殊 中沢へ往、 お駒 同道来ル
	2.20	同日、 お駒 坂下へ往ク
	2.21	お駒 坂下へ使二往ク
	2.26	廿六日夜、 お駒 坂下へ泊ル
	3.7	七日夕方、芳五郎来ル
	3.14	お駒 縫糸買二往
	3.21	お駒 中沢村へ往
	4.2	お殊 、五兵衛江往
	4.14	お殊 ・秀・利根、蔵とり二往
	4.16	殊 、坂下・小山田へ往、同日蔵 とり二往
	4.29	殊 ・秀・利根・莊作主・すわ、 合五人茶摘二往、昼前
	5.3	同日昼前、 こと ・秀・利根・莊 主・音次郎、五人茶摘二往
	5.6	常盤へとね・ 殊 ・鍛冶屋妻茶摘 二往
	5.8	殊 茶摘二往
	7.3	おこと 坂下へ往ク
	7.18	こと 坂下へ往ク
	7.27	こま 寺へ使
	7.28	こま 来ル
	8.7	殊 、坂下江小林之便宜聞ニゆク
	8.15	お殊 亦出来
	8.16	右同人（ お殊 ）坂下へ引渡ス手 紙ヲ付テ与五兵衛弟貞輔へ送り 遣ス

年	月日	記事
安政4.	8.16	与五兵衛義、 こと 一条ニ付来ル、 不取敢返ス
	8.18	お駒 、坂下江往ク、同日泊ル
	8.19	江と屋専蔵来ル、 おこと 一条取 纏咄し也
	8.22	こと 、坂下より帰縁
	9.18	八王子へ古屋敷之用ニ而 こと 往
	9.27	こま 使ニ来ル由
	10.1	昼より古屋敷へ秀・ こと 往
	10.2	こま 、江ど屋より帰ル、但し七 月21日ニゆく也
	10.4	こと 、糸取り
	10.5	こと 、糸取り
	10.6	古屋敷へ こと 稲こきニゆく
	10.16	こと 、糸とり
	10.17	こと 、糸とり
	10.19	こと 、中村へ見舞二往ク
	10.20	坂下へ こと 往
	10.23	廿三日より こま 、弥右衛門方江 被頼往
	10.24	こと 、与五兵衛方江針仕事ニ被 頼往、夕方、 こと 提灯ニ而帰ル、 鶏肉沓皿、小林より菓子沓折持 参
	11.20	夜、五兵衛一周忌取越年忌 こ と ・ こま 往、廿一日夕方帰ル
	11.28	夜、 こま 来り、泊
安政5.	2.5	こま 、坂下紺屋へ使二往
	2.6	こま 、六日ニ和吉へ往
	2.9	こま 、和吉へ往
	2.15	おとせ 来り、泊、同夜小林来り、 泊ル
	2.16	こま 、江戸江往、喜平次同道也
	2.16	こと ・ とせ 、町谷へ往
	2.18	こと ・ とせ 町谷より帰ル、 とせ 坂下泊
	2.23	夜、細野弥市殿来り、泊
	2.24	同人（細野弥市）、日野へ往、 又兵衛ヲ頼、供ニ遣ス
	2.25	弥市、日野より帰ル、 お霜 同道 来ル
	2.27	霜 、瀬谷江嫁ス
	2.29	弥市ら来り、晦日ニ帰ル
	3.10	お霜 、瀬谷より来ル
	3.11	お霜 、日野へ往、夕方祐弘斗り 帰ル
	3.13	朝、友蔵妻一条ニ付、丹次殿迄 こと 往
	3.15	こと 離縁、日野江往
	3.17	霜 ・ こと 、日野より帰ル
	3.18	朝早支度ニ而瀬谷村へ右兩人 （ 霜 ・ こと ）往ク
	4.6	茶買ニ秀・ こと 兩人往ク、下矢 部ニ而五百文之割、三百三十拾弍 文買

【卷末史料Ⅰ】



人別村送一札之事

弁四郎後家

二と

当巳四十七才

娘

二と

同巳十才

一、村方百姓弁四郎娘養育可致之处、

此度神奈川宿親類貞助殿世話

ヲ以、其御村百姓甚右衛門殿方江差遣し

申候二付、人別相除申候、然ル上ハ以来

其御村方人別二御差加へ可被成候、

為後日送一札依而如件

平岡仁右衛門知行所

上図師村

安政四巳年

百姓弁四郎娘相続人

二月日

と せ (爪印)

組合

源兵衛印

親類

芳五郎印

名主

吉右衛門印

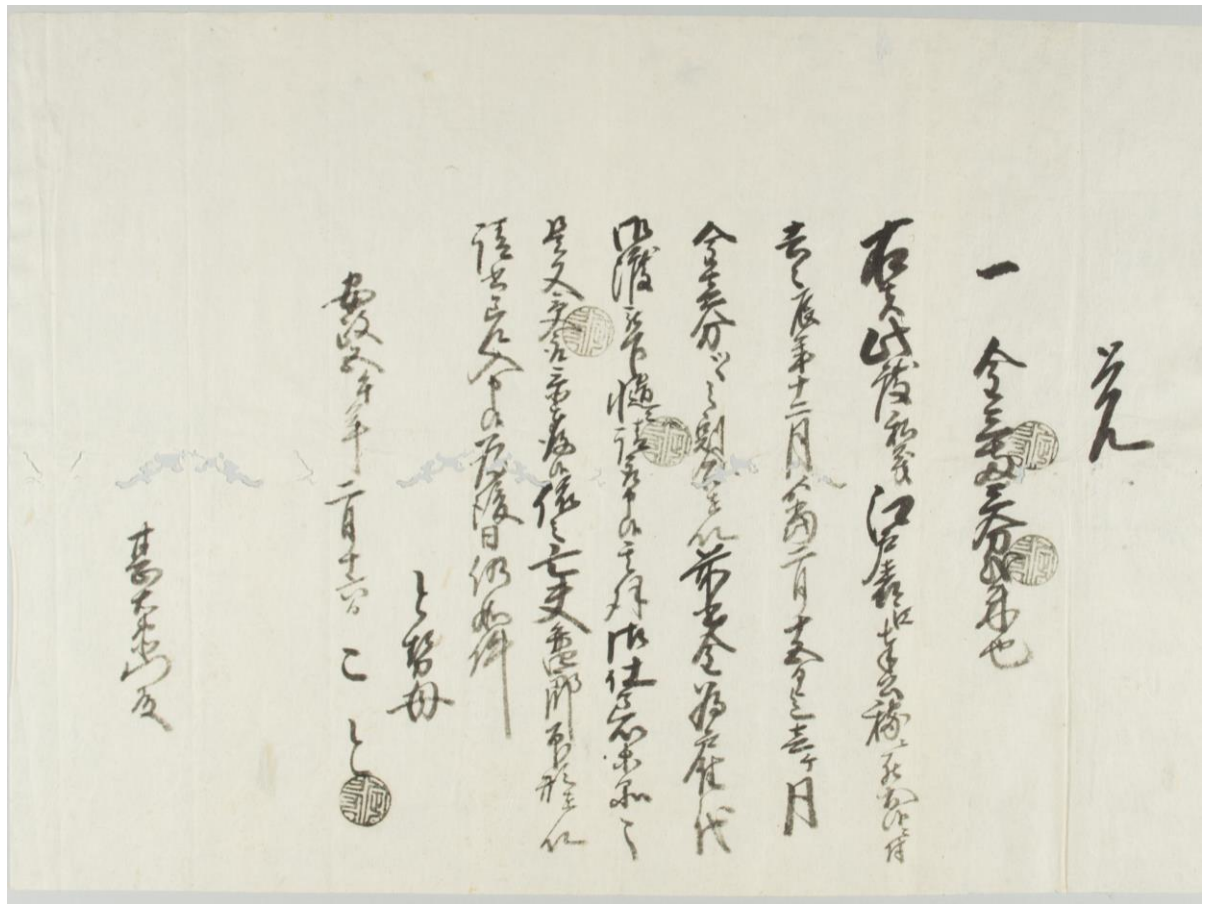
田中市郎右衛門様

御知行所

下図師村

名主

源蔵様



覚

一 金三両三分式朱也

右は此度私義江戸表江奉公稼二罷出候二付

去々辰年十二月より当二月十五日迄、尅ヶ月

金尅分ツ、之割合を以、前書金為雇代

御渡被下、慥ニ請取申候、其外御仕着等品々

是又受取忝奉存候、依之亡夫弁四郎印形を以

請書差入申候、為後日仍如件

とせ母

安政五年二月十六日 こと㊥

甚右衛門殿